

内容紹介

「おら、おいでがっちゃ」。94歳のおばあちゃんが明かす。福島県飯舘村は原発事故後、過酷な放射能汚染に遭遇。住民は「全村避難」で村外に逃れたが、唯一、特養ホーム「いいたてホーム」のお年寄りはとどまった。そこに看護職員が避難先から通ってくる。なぜ入居者は残ったのか。「遺体はケアの通信簿」とは何か。穏やかな村を襲った不条理の中で分断された家族、一途に介護する職員、葛藤して辞める職員、明るく生き静かに看取られる老人の姿を丁寧に追い、国や東電の不作為を問う。

初出

朝日新聞 二〇一三年十二月十日～三十一日

目 次

- [第1章 おら、おいでがっちゃ](#)
- [第2章 だれも来ない夏祭り](#)
- [第3章 避難なんて無理だ](#)
- [第4章 縛られるの、いやだ](#)
- [第5章 幸せだった日を思う](#)
- [第6章 特別な「薬」で治る](#)
- [第7章 102歳の自殺、なぜ](#)
- [第8章 村が人生そのもの](#)
- [第9章 とっさについたうそ](#)
- [第10章 置いていけない](#)
- [第11章 2年迷った末、決心](#)
- [第12章 家族は三つに別れた](#)
- [第13章 娘よ、自由に生きて](#)
- [第14章 3人目つくらない](#)
- [第15章 帰らぬ決意で新居へ](#)
- [第16章 やめた人が得なのか](#)
- [第17章 打ち切られた賠償金](#)
- [第18章 心が折れそう](#)
- [第19章 国の支援、足りない](#)
- [第20章 遺体はケアの通信簿](#)
- [第21章 親身な介護、救われた](#)
- [第22章 今日笑っているよう](#)

第1章 おら、おいでがっちゃ

阿武隈高原に広がる福島県飯舘村は、原発事故で「全村避難」が続く。人口6千人のほとんどが去り、役場も福島市に移った。特例で開いている事業所もあるが、泊まることは許されない。

そこに一つだけ、夜も人が住んでいる建物がある。役場の向かいの特別養護老人ホーム「いいたてホーム」。今、64人が暮らしている。

看護師の佐藤智恵子（さとうちえこ）（51）が、ホールで風呂上がりのお年寄りの爪を切っている。「ちょうど、あの日も同じことをしてたんです」。木造風のホームは天井が高く、天窓から木の床に光が注ぐ。ハイビスカスや観葉植物が目によさしい。

ホームは16年前、ゴミ捨て場の跡地近くにできた。初めは「姥捨山（うばすてやま）でもつくるのか」「どうせ誰も入らねえべ」と冷ややかな声が多かった。ところが好評で、30床だったものが120床まで増えた。

事故後の2年9カ月で、112人いたお年寄りのうち48人が亡くなった。2013年7月には、「最期までここにいたい」と言っていたスイ（92）が願い通り静かにその時を迎えた。佐藤が体をきれいにふいてあげた。

介護する職員は66人いた。今は約半分の37人。避難先から通いだが、夜通しの夜勤はもちろんある。

ホームが残ったのには、理由がある。避難でお年寄りの体調が悪くなるのを防ぎたい。介護士の雇用を確保したい。そんなことで村が特例を望んだことがひとつ。

国の避難基準は年間被曝（ひばく）線量20ミリシーベルトだ。それを超えなければ村に残れる。だから汚染の恐れがある外には出ないようにしている。

しかし、それ以上に切実な理由がある。事故後、家族が迎えにきたのがたった1人だったのだ。

村人の避難の様子をテレビで見ていたステノ（94）がつぶやいた。

「おら、おいでがっちゃ」

自分は置いていかれてしまった――。

ほとんどが認知症の人だ。家族にはそれぞれ事情があるだろう。重介護の人を抱えて避難するのは大変だと思う。とはいえ……。

このお年寄りを支えるのは私たちしかいなかった、と佐藤はいう。

ホームを訪ねると、キクエ（96）が記者のほつたをヒョイとつまみ、「めんこいなあ」と笑った。

第2章 だれも来ない夏祭り

飯館村の「いいたてホーム」で、看護師の佐藤智恵子（５１）は現場のリーダーだ。村の生まれ。高校を出て上京、個人病院で働きながら看護師になった。

３５歳で離婚。２人の子どもを連れて村に戻った。母親は「恥ずかしくて外に出らんねえ」と嘆いた。翌年ホームがオープンしたとき、看護師募集に手をあげた。

仕事がある佐藤は忙しい。そのかわり、村の人が子どもたちの世話をしてくれた。「村に育ててもらったようなものです」。今の仕事は村への恩返しでもある。

ホールのソファには、相撲取りのように大きいクマのぬいぐるみが二つ、どっかと座っている。その向かいが夜勤の詰め所だ。

夜勤は４人態勢。夕方に引き継ぎをし、夜１０時、午前１時、３時、５時に巡回する。おむつ交換や、床ずれ防止に体の向きを変える。コールがあると部屋にかけつける。

介護士のリーダーは西恵子（にしけいこ）（５１）。１６年前の開設時から佐藤と苦労をともにしてきた。

５０歳をすぎての夜勤はつらい、と西はいう。村にいるときは、家から車で１０分だった。いまは避難先の福島市から１時間以上かかる。人手不足で有給休暇もとれない。

疲れから神経がいらだち、お年寄りに優しくなれない自分に気づいてハッとする。

「ホームの将来が見えないと、働いてても不安になるときがあって」

震災前に３８歳だった介護職員の平均年齢は、いま４７歳。妊娠中や、幼い子どもがいる若い職員がやめていったからだ。後任は集まらない。

入居者は２年９カ月で４８人減った。部屋は５０も空いている。入居待機者は８５人いるが、介護の人手が足りないで受け入れができない。

２０１３年８月、ホームの夏祭りがあった。

震災前は毎年、ホーム前の広場で村民も参加して盛大にやった。しかし今はだれも来ない。外でできないので、ホールに赤い小さなやぐらを組み、提灯（ちょうちん）や屋台を並べた。お年寄りは焼き鳥や綿あめをぼおぼる。

西がリーダーの職員グループ「いいたてボンパーズ」１５人が歌って踊る。男性のパニーガール、女性のセーラームーン。仮装がすごい。お年寄りもアヒルやクマの帽子、大きなサングラスでごきげんだ。

「来年も、ホームがあるかどうか分がんねがらな」

だれもいない村で、ホームだけがにぎやかだ。

第3章 避難なんて無理だ

いいたてホームの看護師、佐藤智恵子（５１）は残ることに迷いがなかったわけではない。何度「逃げられるものなら……」と思ったことか。

でも、お年寄りや仲間の顔を思って踏ん張ってきた。

飯舘村は第一原発から３０キロ以上離れている。原発マネーもこなければ放射能も関係ない、はずだった。

２０１１年３月１１日の事故直後、南相馬市や浪江町から逃げてくる人たちを１２００人も受け入れた。家の米を出しておにぎりを握り、避難者を支える側だった。

だが、放射能は降っていた。

１カ月後の４月１１日。飯舘村の年間の積算放射線量が２０ミリシーベルトを超える恐れがあり、政府は村を、１カ月以内に避難すべき「計画的避難区域」にすると発表した。

佐藤は、ホーム近くのグラウンドを自衛隊の車が埋め尽くすのを見た。迷彩服の自衛隊員、ホロのついた大型トラック。雪が舞う。

入院中のお年寄りが、遠くへ避難中に何人も亡くなったと報道されていた。こんな車にホームのお年寄りを乗せるなんて。

震災直後、家族がホームに迎えにきて避難した人はたった１人だった。そのマサ子（８５）は、埼玉県に避難した２週間後、食事でもできず、立てなくなって戻ってきた。

夫（８８）は「ばあさんはホームでないとダメだ」と、疲れ果てて助けを求めた。

佐藤がホームの玄関に出ると、マサ子は「智恵子ちゃ〜ん」と名を呼び、「帰ってきたあ〜」とほっとした顔で、車いすに沈みこんだ。

職員たちは「ここのお年寄りに、避難は無理だ」と確信した。終末期の人は命にかかわる。

マサ子は少しずつ食べられるようになり、トイレにも自分で伝い歩きして行けるようになった。

避難するか残るか、お年寄りは意思を尋ねられず、選べない。ホームに入るときも、自分から願って来た人はまずいない。佐藤はいう。

「ほとんど家族の都合です」。それを今度は「国の都合」で移動させて、だれが面倒をみってくれるというのか。ホームでは９割の人を最期までみとってきた。これ以上、振り回されたくない。

マサ子は１３年の正月、夫が避難する福島市に一時帰宅中に亡くなった。「魚の骨も取ってくれる優しいじいちゃんだった。そのじいちゃんにみとられて、本望だったろうね」と職員たちはいう。

第4章 縛られるの、いやだ

いいたてホームの入居者、キイ子（８８）は、看護師の佐藤智恵子（５１）を見つけると車いすから手を握ってくる。

「私の恩人だ、忘れるわけないべしたあ」

佐藤の名前は忘れている。それでも恩人だと思うには、こんないきさつがある。

キイ子は５０年前、夫を４１歳で亡くした。豆腐屋などをして４人の子を育てる。次男（６３）の家族と暮らしていたが、５年前、脳梗塞（こうそく）で入院した。病院では、動くと危ないからと両手足をベッドに縛られた。

「ほどいてくんち。逃げねから」

何度も頼んだが聞いてもらえなかった。退院はしたが、息子夫婦は仕事が忙しくて介護できない。いいたてホームへ入居を申し込んだ。

佐藤がキイ子を訪ねると、誰もいない家で、居間のこたつにぼつんと座っていた。

「人生終わりだ。どこにも出たくね。二度と縛られるのはいやだ」

入院のショックは大きかった。気力を失い、一人では立てなかった。

佐藤は話をじっくりと聞き、「立ってみましょうよ」と手をとった。すると、「立てた！」。

試しにホームに来てみないかと誘うと、キイ子は「行ってみつか」。ショートステイで気に入って、そのまま入居した。

キイ子は、戦前に上京。働きながら女学校の夜学で学び、貯金局に勤めた。

「東京大空襲の夜はＢ２９がうなってきた。照明弾で庭の柿の木の葉が一枚ずつ、はつきり見えるほど明るくなって。兄貴２人は戦（いくさ）で死んだ。ガダルカナルと……」

涙ぐむ。空襲の後、村に戻った。「戦争のこと考えつと、よく生きてきたと思う」

原発事故で、避難しようとは思わないですか？

「ここがいい。こんなに世話してくれる所、ねえもの。子どもは仕事があるからなあ……。原発はなあ。こんな時代になるなんてなあ」

２０１３年８月、キイ子の米寿の誕生日がやってきた。次男夫婦がきてくれた。小学校の音楽教師だった次男がフルート、妻が琴をひいて「花嫁人形」をみんなで歌った。

２週間後、家族がお祝いに福島市内の料理店に集まった。孫７人、ひ孫３人、総勢２０人。放射能が心配で孫やひ孫はホームへ行くのを控えてきたので、会ったのは３年ぶりだった。

第5章 幸せだった日を思う

いいたてホームの看護師、佐藤智恵子（51）が「いい相棒同士」と呼んでいる入居者がいる。はる子（80）とキヨイ（85）。2013年8月の夏祭りで、2人は黄色いアヒルの帽子をかぶってご機嫌だった。

はる子は会津の出身。結婚後、流産を3度経験する。その後やっと男の子にめぐまれた。夫は電話線の作業員だったが、20代のとき仕事中に電柱から落ちて死んだ。人生に絶望したはる子は自殺を図る。幼い息子が人を呼びに走って助かった。

のちに、妻を亡くし2児を抱える男性と知り合い、再婚した。それ以来、自分の息子とは絶縁状態だ。

その夫から虐待を受ける。福祉事務所に保護され、ホームに入った。はる子の個室に名札がないのは、夫が捜しに来るのを恐れたからだ。

「人生でいいことなんて、ひとつもね」という。

夕食後、はる子はため息をつく。「もう死にたい。生きててもしょうがね」。介護士の坂本洋一（さかもとよういち）（58）が「そういいながらメシもちゃんと食って、薬ものんでっからな」。笑って食後の薬を渡す。あごを上げ、粉薬を水でゴクンとのむ。

きょうの夕食は、煮込み豆腐におひたし、みそ汁に炊き込みご飯。ほとんど残さず食べている。

佐藤は「お年寄りが食事をして薬をのむのは、せめて今日一日、平安でいたいからだと思う」という。

はる子は、いつもいっしょに食事をするキヨイを「おかあさん」と呼ぶ。最近、キヨイの認知症が進み、「話が通じねえでさびしい」。

でも夕食後は2人並んで、テレビの「鬼平犯科帳」に熱中する。

悪党が女に「初めてほれたぜ」とささやく場面。「そんなわけねえべ!」「なあ!」。いいあつて笑い転がっている。

放射能、どう思いますか？

「よくわかんねえな」「見えねえしな」「母親がむかし原発で働いてたと聞いたけどな」

汚染水のニュースがテレビで流れた日。はる子「原発はいつまでも大変だ、なあ」。キヨイ「んだ」。

消灯後、はる子の部屋で話を聞く。再婚前、先方の8歳の娘が小さな手で一家の食事をこさえていた。夫も酒が入らなければ優しくかった。

一番幸せだったのはいつですか？

「そうさなあ、最初の夫と結婚したときかな。式で髪も結って」。はる子には夫が初恋の人で「初めての男だあ」。顔がボツと華やいだ。

第6章 特別な「薬」で治る

いいたてホームの看護師、佐藤智恵子（51）が「住民台帳みたい」という男性入居者がいる。ホーム開設の年からの馨（かおる）（81）だ。認知症だが、入居者や職員のことを実によく知っている。

「飯舘村はむかし、飯曾村と大舘村が合併してできたんだぞ。一字ずつとって名前をつけてな」

車いすを自分でこいで動き回り、話しぶりもしっかりしている。おやつの時間、「気持ちだから」と蒸しパンを半分わけてくれた。

そんな馨も、原発事故直後は、置き去りにされたくない、と、車いすで職員について回った。

「みんなの行くところさ行く。死ぬときはいつしよだ、怖くはねえど。どうせ一回は死ぬんだ」

ホームのブロックごとに線量計が置かれている。馨の部屋の近くは毎時0・24マイクロシーベルト。ホームの向かいの村役場前は毎時0・56マイクロ。ホットスポットはピンクのひもで囲ってある。

原発は困ったことだ、という。

「放射能が落ちてきて、土にしみこむ。百姓も、もうだめになって。でも、ここだけはいてもいい、避難しない方がいいんだと。ただ、外に出てはだめだど」

馨は農家の8人兄弟の次男。戦後に14歳で上京して大工の見習いになり、出稼ぎもした。16年前、脳出血で倒れてホームに入った。

「年金に入ってるからここにいられる。死ぬまでいる約束で入ったからここがいい。みんな親切だ」

妻は入居前に、自分の妹を頼って北海道に移り住んだ。息子は福島市に避難した。

「人が少なくなったなあ」

全村避難後、入居者も職員も減ったのが寂しそうだ。定員が30人から120人まで増えた時代を知るだけに、心細いのだろう。

馨の部屋でアルバムを見せてもらった。運動会では、車いすのパン食い競走でハチマキ姿の馨。「若かったなあ」

馨は「背中が痛い」といっては医務室を訪ねる。「前のあの薬、効くんだ」。看護師の佐藤が「強いから何度も飲めないけど、特別ね」と白い粒を渡す。馨はそれを飲むと、安心した様子で帰る。

佐藤は「ラムネ菓子なんです」といった。「お年寄りみんな自分を特別にしてほしい。あの一粒を求めてくるんです。で、治るんです」

医務室には、こんな「特別な薬」がいっぱいある。

第7章 102歳の自殺、なぜ

いいたてホームにはデイサービスで昼間だけ通ってくるお年寄りも多かった。

その一人、飯舘村で最長老、102歳の久保文雄（おおくぼふみお）が、2011年4月12日、自宅で自ら命を絶った。大震災から1カ月後のことだ。

文雄が朝食に起きてこない。いっしょに暮らす次男の妻、美江子（みえこ）（60）が部屋に呼びに行くと、タンスにもたれて足を投げ出していた。両手を前できれいに重ね、服もちゃんと着ている。

「何やってんの、じっちゃん！」

腕をゆすると冷たい。上から2段目の取っ手に通したひもが首にのびている。へたりこんで、朝早く出勤した息子を電話で呼び戻した。

警察がきた。文雄を調べていた私服の警官がいった。

「かあちゃん、心配すつことね。覚悟の自殺だ」

文雄が背にしていたタンスは10年前、94歳で亡くなったばあちゃんの嫁入り道具だ。首にかけたひもは、レジ袋をよってつなげていた。顔は安らかだった。

102歳で頭はぼけず、身の回りのことも自分でできる。週2回のデイサービスを楽しみにしていた。なのになぜ……。

遺書はなかった。

美江子には思い当たることがあった。前日11日、テレビで「村が計画的避難区域に設定され、全村避難することになった」というニュースが流れたときだ。文雄がいった。

「おら、ここ出たくねえ。ここで死にてえ。どうしても出なくちゃなんねえのか」

美江子は「みんな出んだ、しょうがねえべ」と答えた。

「早く死んでれば、原発が爆発したことを聞かねえですんだ。ちつと長生きしすぎたなあ」

「じっちゃん、変なこと考えんでねえよ。最後まで一緒だかんね」

夕食に、デイサービスに行くときの格好で出てきた。襟付きの黄色のチェックのシャツにジャージのズボン。文雄のよそ行きだ。何でかなと思ったが深く考えなかった。

おかずはアジのフライに野菜と鶏肉の煮物。煮物は好物なのに、なぜか手をつけなかった。

部屋に戻ってから、何度もトイレに立つ。11時ごろにも出てきた。

「じっちゃん、トイレ？ すんだら早く寝んだよ」

「あいよ」

これが最後のやりとりだった。

第8章 村が人生そのもの

102歳で命を絶った大久保文雄の死亡時刻は、検視の結果「2011年4月12日午前0時ごろ」。次男の妻の美江子（60）が2階に上がってまもなくだった。

文雄は明治41年12月20日の生まれだ。米に養蚕、葉タバコや野菜もつくり、働き者だった。17歳のとき、1歳下のミサオと結婚。5人の子に恵まれる。

40年前、工場勤めをする息子の一男（かずお）の嫁に、隣の伊達市から美江子を迎えた。農業を知らない美江子に、文雄はやさしかった。

葉タバコは夏になると、桃色の花をつける。「かわいい」と感激する美江子を文雄は喜んだ。食後は必ず「うまかった、ごちそうさん」という。孫をかわいがった。

10年前、妻のミサオが94歳で亡くなる。その後、95歳からいいたてホームのデイサービスに週2回、通うようになる。

ホームをずいぶん気に入って、年寄り仲間のおしゃべりやゲームを楽しんでいた。

職員の坂本洋一（58）はいう。

「頭もしゃんとして、新聞は読むし、好奇心が旺盛。あれだけ元気だった人が、何でだべ……」

風呂で背中を洗うと、いつも必ず「世話になるな」と礼をいった。誕生日にはホームで、好物のそばをわざわざ打ってもらった。それをとても喜んでいた。

99歳の白寿、100歳のお祝いも盛大にやった。祝いの赤い頭巾をかぶって家族に囲まれた写真が、村の広報誌の表紙を飾った。そのとき村から贈られたハナミズキを茶の間からよく見える所に植え、毎日眺めて楽しんだ。

戦争には行かず、病気で入院したこともない。「１０２年間、村を出たことがなかった。村が人生そのものだった」と美江子という。

昔からよく知る、村の綿津見（わたつみ）神社の宮司、多田宏（ただひろし）（６６）はいう。

「代々の農家は、手をかけた土への思いの深さが違う。貧しいからこそ、助け合って生きてきた。１００歳を超えて見ず知らずの所で暮らす気にはなれなかったんだべか」

１００歳の祝いの後、息子の一男が冗談で「これから誰の世話になるんだ」と尋ねた。文雄は笑った。

「おめえの世話にはなんね。かあちゃんに見てもらう」

文雄は美江子がばあちゃんを介護してみとるのを見ていたのだ。美江子はうれしかった。息子より嫁のおらをご指名かい？

第9章 とっさについたうそ

102歳の久保文雄が自死した2011年4月12日。警察の調べが終わった昼ごろ、嫁の美江子（60）の携帯電話が鳴った。夫の一男からだった。

一男は末期の膵臓（すいぞう）がんで新潟の病院に入院していた。

「変わったことないか？」

「うん、みんな元気だよ」

美江子とはっさにうそをついた。父親の自死でショックを与えたくはなかった。

夫はもともと南相馬市で入院していたが、原発事故の直後、自衛隊の車で新潟に搬送された。それから毎日2回、必ず電話があった。

文雄の死の5日後、往復8時間かけて新潟の病院に夫を見舞った。夫は心配して様子を尋ねた。

「じっちゃんはどうした？」

「ホームに預けてきた」

夫は「福島に帰ってえ」といつていたが、6月4日、66歳で亡くなった。骨になってやっと帰ってきた。

「あの世へ行ってびっくりしたろうね。あれ、じっちゃん、先に来てたのかって」

飯舘村は全村避難だが、美江子は1日おきに、避難先の南相馬のアパートから自宅を訪ねる。ここに、じっちゃんと夫がいると思うからだ。位牌（いはい）もそのまま置いてある。

玄関を開けるとまず「ヤッホー、帰ったよ！」と明るく叫ぶ。線香をあげ、手を合わせる。ネコのマイと犬のクマに餌をやる。それから、声を上げて思い切り泣く。

「父ちゃんの家、つくるつべ」。長男（30）がいう。墓のことだ。その年の12月、2人の墓を建てた。

13年8月13日、猛暑の盆の入りに墓参りをした。自宅に近い丘の一番上まで、急な坂をゆっくり上る。墓石には「心」の文字を刻んだ。

左隣には、36年前に生後まもなく亡くなった男児のために、お地藏様をたてた。供えた赤い風車がカラカラ回る。ヒグラシが鳴いている。

「自分にはまだ『仕事』があるから生かされているんだ」と美江子がいった。

「原発事故さえなければ、じっちゃんは今もデイサービスに通ってのんびり暮らしていたと思う」

「じっちゃんが本当は何をいいたかったのか。ちゃんと訴えたい」

仕事とは、東京電力を相手に損害賠償請求訴訟を起こすこと。

102歳まで生きた人が、命を絶つひもを自分でレジ袋をよって作るなんて。「このままでは終われない」

第10章 置いていけない

いいたてホームの看護・介護の職員は37人いる。

リーダーの看護師、佐藤智恵子（51）たちが心配したのは、いちばん若い渡邊美樹（わたなべみき）（21）のことだ。

飯館村で生まれ育ち、高校を卒業してすぐホームに就職した。その翌年、震災に見舞われる。

地震発生の午後2時46分。美樹はホームの3時のおやつ用にレモンティーをつくっていた。建物は大きく揺れ、停電し、断水した。夜はロウソクの中、不安がるお年寄りに「大丈夫だよ」と繰り返した。それからは無我夢中の日々だった。

当時、20代の職員は20人いた。原発事故後、妊娠中や幼い子のいる女性職員は次々にやめていった。

私はどうしよう。両親に相談すると「自分の人生だから自分で決めなさい」といわれた。結婚しようと思っている彼は「やめたほうがいい」。だが、決断ができなかった。

飯館村の自宅では3世代で暮らしてきた。事故後、祖父母は東京の親戚宅に逃れた。美樹は、両親や4歳下の妹といつしよに、隣の川俣町に避難した。そこから紫色の軽自動車で行復1時間かけて通う。

ホームは、お年寄り10人前後のグループをひとつの「家庭」として、なじみの職員による「ユニットケア」の方式をとっている。「介護する人される人」ではなく「ともに暮らす人」。スタッフは私服だ。

美樹のユニットにいる入居者の高齢女性は「あなた若いんだし、将来のこともあるから、やめていいんだよ」といつてくれる。「私たちのことは気にしないで」

美樹は、花の名やおこわの作り方など、いろんなことを教えてもらった。「自分のばあちゃんみたい。心配してくれると、余計に置いてはいけないなって思って……」

ホームの職員の中には、美樹の同級生のお母さんが4人いる。その同級生たちは、関東など遠くに避難した。お母さんたちは美樹がここにいることを心配する。

ホームが村に残っていることを世間はどうみるのか。同僚が夜勤のときにパソコンをのぞくと、いいたてホームについてツイッターで議論が飛び交っていたという。

「年寄りなら残っていいのか」「若い子が働いていいのか」「殺人ホーム」――。

親戚から「東京おいで」といわれた。やめた元同僚から別のホームに誘われたこともある。だが、踏ん切りがつかなかった。

第11章 2年迷った末、決心

いいたてホームでもっとも若い職員、渡邊美樹（21）は、じいちゃんばあちゃんを置いてはいけなとホームに残った。

放射能が心配ではないのか。

「除染しているからいいっていうけど、大丈夫かどうか。正直いって分からない」

線量計はいつも持ち歩く。年間の被曝（ひばく）は20ミリシーベルトまで。毎月、ホームが積算量を記録する。限度内だからいいのかなと思っている。

でも、安心できない。外ではマスクをした。飯館で着た服は全部捨てた。通勤用の紫色のマイカーは週に2回は洗う。事故から2年半たって以前より放射能は少なくなったと思うが、やはり気を使う。

2012年12月、友人の家に誘われた。生まれて半年の赤ちゃんがいる。出かける直前、新品の服に着替えて行った。

結婚はしたい。できれば子どももほしい。その子に万一のことがあったら、と不安になる。「だったらホームをやめべきだ」と思う。だが踏ん切れない。

やめたら、新しい場所で人間関係を一から作り直さなければならない。目の前にお年寄りたちがいる。決めきれない。

いま避難している川俣町は、飯館村よりずっと便利だ。コンビニがいくつもある。DVDの店も近い。

「便利すぎて……。これに慣れたら、飯館に戻れないなと思う」

13年8月、美樹はとうとう決断した。もう、やめよう。

2年迷ったあげくの決心。きっかけは、彼の父親の死だった。12年11月、胃がんのため63歳で亡くなる。13年の新盆で線香をあげていて、しみじみと感じた。

「自分の人生もいつ終わるか分からない。一度限りの人生だから。やっぱり時間は大切だと思った」

大切な人のそばにできるだけいたい。お年寄りたちのことはもちろん頭に浮かんだが、結局「自分を第一に」決心した。

介護主任の小林明美（こばやしあけみ）（44）たちに伝えた。「若いしね」。小林は美樹の決心を予想していた。さみしいけれど、引き留められなかった。

美樹は13年9月末、退職した。

9月30日の離任式で、施設長の三瓶政美（さんぺいまさみ）（65）は「飯館に戻れるようになったら、いつでもホームに帰ってきなさいね」といった。

美樹はありがたかったが、「戻れるようになったら」って、いつになるんだろうと思った。

第12章 家族は三つに別れた

いいたてホームの職員の日々の生活は並大抵ではない。

2011年3月11日は、飯館中学校の卒業式だった。ホームの介護主任、小林明美（44）は長男が卒業生だったために休みを取った。午後は家族でのんびりと家にいた。

そこにグラッと来た。取るものもとらずあえずホームへ走った。あとは怒濤（どとう）の日々となる。

それまで、県職員の夫（49）と高校生の次女、中学生の長男、夫の父（78）の5人暮らしだった。

20日。父親と次女、長男の3人を、水戸市で看護学校に通う長女（22）のアパート8畳間に避難させ、夫婦は村に残った。

悩んだのは子どもの学校だ。4月から高3、高1になる。手もとに置きたかった。しかし放射能のリスクはできるだけ避けたい。

結局、受験勉強に集中したいという次女、サッカーを思う存分やりたいという長男の希望を優先し、それぞれ水戸の高校へ転入学させた。

受け入れ先の学校関係者から「子どもだけの生活は避けてほしい」といわれた。だが、夫は職場が被災支援の拠点となり、とても離れられない。小林もホームのお年寄りを置いてはいけない。

めどが付くまでと思って、夫婦で南相馬市のアパートを借り、仕事を続けた。夫の父は川俣町の親戚の家を借り、犬といっしょに住むことになった。家族は三つに別れた。

小林が携帯電話の写真を見せてくれた。子どもたちが水戸へ発った日、彼らが台所の伝言板に残した絵文字まじりのメッセージ。

「2人がいなくても今まで通り仕事頑張ってね！ さびしくても泣かないでね！ いつもありがとう」

もう1枚は、水戸から送ってきた子どもたちだけの写真。

4月。長男の高校の入学式には行けず、制服も間に合わなかった。登校初日、先輩に借りた紺色のブレザーは袖が長い。それでも笑顔。それを長女が撮った写メールは、くじけそうなときにみる宝物だ。

小林が心配したのは食事だ。ちゃんと食べてるの？ お弁当は？

休みの前日、仕事を終えた夜8時から車を飛ばして水戸へ。着くのは深夜だ。

翌朝、弁当を作って送り出し、掃除、洗濯、買い物をしていっしょに一晩過ごす。未明から弁当を作り、午前4時には水戸を発つ。切なくて、運転しながら号泣する。

第13章 娘よ、自由に生きて

いいたてホームの介護主任、小林明美（44）は、水戸の子どもの所から帰る未明の車の中で、いつも泣いてしまう。だが朝日が昇るころ気持ちを切りかえる。

「子どもたちも、がんばってくれている。だから私も」

小林は子ども2人を水戸に避難させた。「なのに20代の若い職員を働かせていていいのか」という非難を耳にしたこともある。

ホームの窓を開けられるようになったのは2013年春からだ。それまでは放射能が心配で閉めたままだった。談話室に自販機があるが、飲料会社が補充に来ないので空っぽだ。

事務長の佐々木裕行（ささきひろゆき）（52）も、妻（48）と高1、中2の娘2人を神奈川県に避難させている。

次女が転入した中学では、福島から避難してきたことを伏せてもらった。だが担任が教室で「福島県」と印刷された封筒を次女に渡したため、生徒たちに分かってしまった。「あの子、福島なんだよ」とうわさされているのが耳に入った。

仲間外れにされた。男子生徒に「学校に来られないようにしてやる」といわれ、早退が増えた。佐々木はいう。「弁当は家に帰って食べていたんです。親には黙って」

半年後、同じ県内の別の中学に転校させ、家も近くに引っ越した。

次の中学では担任も気をつかってくれた。でもなぜか分かってしまった。生徒のひとりが「放射能がうつるう～」といった。軽い冗談だったのかもしれない。だが、次女は登校できなくなった。

13年春、高校に入学して、いまは落ち着いている。次女の心の傷は消えていないと思う。

妻は子どもたちのことで悩み、円形脱毛症になった。車のナンバーを福島から神奈川に替えた。

家族と離れた生活が続くが、月に1回は帰る。車で片道6時間。子どもたちには「福島には帰らなくていい、自由に生きて」と伝えている。

職員の中には、孫を抱かせてもらえなくなった人もいる。ホームで働くと放射能がつくとも思ったのか……。親が認知症になって介護が大変な人、避難先で病気の親や兄弟を失った人もいる。

NPO「特養ホームを良くする市民の会」理事長の本間郁子（ほんまいくこ）（65）は12年夏、ホームを訪ねて驚いた。「家族がバラバラになって、職員がこれほど人生を変えてまで高齢者を支えているなんて。他の国ではまず考えられない」

第14章 3人目つくらない

飯舘村の南端にある長泥（ながどろ）地区は「帰還困難区域」だ。村でただ1地区、バリケード封鎖されている。放射線量は年間50ミリシーベルトを超え、人は住めない。

いいたてホームの看護師、菅野若菜（かんのわかな）（35）は、その長泥で夫（35）と小学生の子ども2人、夫の祖母（83）の5人で暮らしていた。

夫は石材店に勤め、地元の消防団員だった。原発事故の直後、ガソリンスタンドに長い列ができた。その整理を任せられ、外気に身をさらしていた。

爆発の2日後、夫は、祖母と子どもを福島市の親戚の家に避難させることにした。ホームで働いていた菅野の携帯電話が鳴った。

「おまえはどうする？」

迷った。だがお年寄りを置いてはいけない。泣きながら答えた。

「私は仕事があるから残る。子ども連れて逃げてっ」

夜は雪になった。寒い。家に帰っても独りだな。そう思って山道を運転していたら、自宅に明かりが見えた。夫がいた。子どもを祖母に預け、「おまえが残るなら俺も」と戻ってくれたのだ。

2人は1カ月、長泥で暮らす。

後で長泥の放射線量を知って驚いた。3月17日は毎時95・1マイクロシーベルト。18日が52マイクロで、年間に換算すれば「帰還困難」の基準である50ミリを大きく上回る。

菅野は福島市の会社員の家庭で育つ。20歳で結婚した。

両親と長泥の家を初めて訪ねたとき、父は「大草原の小さな家」だな、と驚いた。材木むき出しの掘っ立て小屋だったのだ。テレビで見たアメリカ開拓時代の家族の家だ。

夫の祖父の手作りだった。隣家は林の向こう、500メートル離れていた。

ふろとトイレは外にある。トイレはくみ取りで極寒時は凍る。雨の日は、赤ちゃんをタオルと毛布にくるんで、傘をさしてふろに行った。

でも苦にならなかった。

井戸水がおいしい。髪を洗うとさらさらになった。

春の桜、稲穂が黄金に輝く秋、幻想的な雪の冬。菅野はとくに新緑の季節の、風のにおいが好きだった。

2人の子どものはのびのびと育った。学校帰り、木の実をつまんでモグモグしながら帰ってくる。野イチゴ、スモモ……。

だから、もう1人、子どもがほしかった。でも夫と「3人目はつくらない」と決めた。「あれだけ放射能を浴びたから」だ。

いいたてホームの看護師、菅野若菜（35）。原発事故後もすぐ避難せず、長泥（ながどろ）に1カ月住んで、ホームに通い続けた。

「3人目の子どもはつくらない」と決めたのは、その間に「放射能を浴びてしまった」と思うからだ。

夫は今も、外出先で赤ん坊を見ると「かわいいね、いいな」という。

ほしかったんだな。

私が「ホームに残る」といわなければ、夫はもっと早く、家族で村を出るつもりだったようだ。つらい思いをさせてしまったと思う。

小学生の子ども2人も、避難前の2日間、放射能を浴びているとは知らず、外で遊ばせ、井戸水も飲ませた。

震災から10カ月後、夫にホールボディの内部被曝（ひばく）検査の順番が回ってきた。「人体に影響はない」といわれたが、やはり気になる。

子どもたちは2013年5月、甲状腺のエコー検査を受けた。「心配はない」という結果だったが、「毎年の検査を」といわれた。

食べ物は、スーパーに出ているものなら、福島県産でも安心だと思って食べている。手洗いとうがいに注意して、放射能とはうまくつきあっていくしかないのかと思う。

将来、子どもたちが就職や結婚をしたいと思ったとき、長泥出身ということで差別されたりしないか。最近、それが気になっている。

「それで反対されたら、子どもに申しわけないと思います」

菅野はしばらく黙り込む。

「.....でも、自分がどんどこで育ったか。包みかくさず話せて、すべてを受け入れてくれる人と結婚しなさい。そういます。長泥はあんなにいい所だったですもん」

子どもたちは今も、「もう一回、キノコ採りに行きたかったね」という。どんなに豊かな暮らしをしていたことか。お金では取り戻せない。

菅野は、避難先の川俣町からホームに通い続けている。

これから先、帰村宣言が出たとしても村に帰るつもりはない。

「将来、娘が孫をつれて安心して里帰りできる家がほしかったけれどね。長泥では難しいと思うから」

夫婦で話し合い、祖母にも許してもらって、賠償金で川俣町に土地を買った。実家のある福島市と飯舘村のちょうど真ん中だ。13年11月、家ができた。

「ホームはどうなるか分からないけど、ここから通って、最後までいます」

第16章 やめた人が得なのか

いいいてホームの事務長、佐々木裕行（52）は憂鬱（ゆううつ）だ。

「ホームをやめずにがんばってきた職員が、正直者がバカをみるような状態になってしまって……」

それはこういうことだ。

国から避難を指示され、避難先で再就職した人々に対し、東京電力は「特別の努力」を認めると決めた。再就職への努力を評価する、という意味だ。2012年6月に発表し、その年の3月分から適用した。

新たな仕事の収入が50万円を超えない限り、それとは別に、原発事故前の収入を全額支払う。

たとえば、ホームをやめて避難先で就職すると、新たな給料と別にホーム時代の給与が補償される。仮にホームの月給が20万円で、新しい仕事も20万円なら、計40万円が収入となる。

やめていった元職員が、残った職員に電話してくる。「いつまでホームにへばりついてるの？ やめたほうが得なのに」。残った職員はぐっと言葉に詰まる。

「特別の努力」が始まる前、事務長の佐々木は職員に「退職金のことなど、長い目で見たらやめないほうがいい」といつていた。しかしこの賠償は、まとまると大きな額だ。

そこへもってきて東電は13年6月、「特別の努力」を震災時まで1年さかのぼって払うと発表した。職員に驚きと落胆が広がった。

ホームは、村が出資する「いいいて福祉会」が運営し、理事長は村長だ。デイサービスやヘルパー派遣などの在宅支援や保育所もあった。震災後、ホーム以外は休止・縮小し、全体で約70人がやめた。佐々木は「特別の努力」の制度が退職を助長したような気がする。

しかしホームには、残されたお年寄りたちがいる。介護が必要な人々だ。おいそれとやめて出て行くわけにはいかない。

「新しい仕事を探す努力は大変かもしれないけれど、避難区域に残って働いている私たちも大変なんです。村の復興のために、村民が帰ってくるまでここでもがんばろうと努力してきた。それが認められないのは不公平だと思います」

当初は「2年で帰村」のはずだった。それが長引き、職員の心も揺れ、騒ぐ。「まじめに働いてきた私たちがバカをみた」「がんばってきたのに、だれもそれを認めてくれないなんて」……。

そして、矛盾はこれだけで終わらない。

第17章 打ち切られた賠償金

避難区域内のいいたてホームで、同じように村外から通って働きながら、手に入る賠償金が違う。そんなケースもある。

原発事故のあった2011年3月11日に飯館村に住所があった人は「精神的損害の賠償金」として、毎月1人10万円が支払われる。赤ん坊から高齢者まで同じだ。4人家族なら月40万円、7人家族なら70万円。

しかし避難の指定が解除された地域に住んでいる人の「精神的損害の賠償金」は、打ち切られた。

ホームの事務職員、鳴原（しぎはら）やすえ（46）は飯館村に生まれ育ったが、震災の4年前に南相馬市に引っ越している。今の住所地の賠償金は12年8月に期限が切れた。

「住所によって支払われる賠償金ですから、飯館村民と他の住民は違う。それは分かります」

最初は仕方ないと思っていた。でも、「あんた引っ越して損したね」「運が悪いね」という知人もいる。

「ホームに通って一生懸命やってきたのに、バカにされたようで、ひどく傷つくんです」

鳴原はそつと指で涙をぬぐう。自分が置かれた境遇の不条理。だれもそれを親身に考えてくれないように思えて、悲しくなるのだ。

東京電力がいう「特別の努力」では、ホームをやめた人のほうが賠償で優遇される。加えて、同じ職員の中でも住所が違っているだけで賠償に差がある。ダブルパンチだ。

鳴原は、ホームに残って働く人には3タイプあるといった。

（1）お年寄りとかかわるのが本当に好きな人。

「立派な方たちで、残った大多数はこういう人たちです。一生懸命で、頭が下がります」

（2）やめるタイミングを逃してしまった人。

「やめるかどうかで、いつも葛藤している人たちです」

（3）やめる選択肢さえ選べない人。

「やめたくても、賠償の対象外なので収入がなくなる人たち」

鳴原は「私は3番目なんです」といった。事故直後は「がんばろう」って団結していたのに……。事故からもう2年9カ月。職場や家庭環境の変化、賠償問題のモヤモヤすべてに疲れ果てた。「今はすべて忘れて、静かに暮らしたい」と願う。

施設長の三瓶政美（65）は、鳴原の痛みが分かる。「ホームの存続を認めたのは国。だから国は、やむにやまれず残った職員の待遇を十分考えてほしい」

第18章 心が折れそう

飯館村の夜は、深い海の底にいるようだ。いいたてホーム以外に明かりがほとんどないからだ。

2013年9月、介護士の浦住（うらずみ）すみい（49）の夜勤につきあった。詰め所では虫の音が聞こえる。静かだ。

午後11時すぎ、ピンポンとコールが鳴った。「キヨイさんだ」。浦住が廊下を小走りで行く。

「トイレですね」。笑顔でキヨイに声をかける。車いすに移してトイレへ。外で待つ。ベッドに戻す。「ゆっくり眠れるといいですね」と布団をかける。キヨイは多いと1時間おきに呼ぶ。「遠慮せず安心して呼べるように、声のかけ方が特に大切。やさしくしないと」

午前1時の巡回。寝たままの人の体の向きを変え、おむつを換える。一人ひとりについて教えてくれた。

「ステノさん、髪が真っ黒でしょ。94歳なんですよ」

記者があいさつすると「いくつ？」と尋ねられた。いい笑顔だ。

4年前に入居したときは、鼻からチューブを入れて寝返りも打てなかった。それが今では、自分で車いすをこぎ、食べ、笑う。

ある夜、浦住がおむつを換えて、お尻の周りを温かいタオルで拭いた。するとステノがおどけた。

「おー、ポーポイ！ そんな温かいタオルでそこ拭かっちゃら、おら若がえつちまう」。ポーポイとは、ホカホカする、という意味だ。

浦住も笑顔になる。「ステノさんはかわいいから、おじいちゃんにかわいいがられたでしょ、というと、うん、かわいがらつちやよって」

重造（じゅうぞう）（78）。初めは車いすの上であばれたこともあったが、今は穏やかだ。職員となじみ、安心感をもってくれたんだろう、と浦住はいう。

セツ子（86）。終末期で話すことはできないが、表情や目の動きで思いを読み取る。浦住が話しかける。「ね、目が動いたでしょ」

浦住のことを、看護師の佐藤智恵子は「介護のプロ」といつていた。それはこういうことなのだろう。介護の仕事が心底好きで、お年寄り一人ひとりを大切にしている。

一段落した深夜、その浦住がふともらした。「心が折れそう……」。16年前のホーム開設時から働く。8人いる介護リーダーの一人だ。

いちど東京に出たが村に戻って結婚した。ホームにはパートで入り、ヘルパー資格をとって正職員になった。ケアマネジャーの資格も手にしてがんばってきた。それなのに、どうして？

第19章 国の支援、足りない

いいたてホームの介護職員、浦住すみい（49）が「心が折れそう」といったのはなぜなのか。

一つには、例の「精神的慰謝料」の問題がある。

震災の前年に隣の川俣町に引っ越したので、飯館村に住所がない。そのため「避難区域」にあるホームで村民と同じ仕事をしていても払われない。それが腑（ふ）に落ちない。

もっと理不尽だと思うことがある。ホームの人手が圧倒的に足りないのだ。

「避難区域でホームを続けることを認めたのは国ですよ。だったら、もっときちんと人手のことを考えてもらいたいんです」

ホームの職員が、毎月のようにやめていく。ホームができて16年。先進的な個室中心で入居者のお年寄りや村人から安心され、信頼されるまでに築上げてきた。自分の親を入れたいホームにしたいと思ってきた。それが崩れかけている。

ホームでは、入居者と介護者を組み合わせたグループをつくっている。ユニットケア方式だ。なじみの関係ができ、お年寄りが職員や環境に安心感をもてるようになる。

しかし職員が減ったため、他のグループの担当者がケアをする場合も出てきた。いつもと違う職員に、不安を感じるお年寄りもいる。

入居者は重度化し、チューブで栄養をとる人が増えた。手間も時間もかかるのに、人手は足りない。平均年齢47歳。20代が入ってこない。

「若い人に、私たちが誇りをもってやってきたケアを引き継げない、希望がもてないのがつらいんです」

やる気さえあれば人は集められるのに、と浦住は思う。

「たとえば、今の給与より5万円高くする、といえば、希望者は随分いるんじゃないかと思う」

職員は避難区域で働いている。ホームの経営団体であるいいたて福祉会は、特殊作業手当を支払う。額は月2万円。1日千円、月20日勤務の計算で、東京電力に請求する。

しかし国からは何もない。

「村が存続を要請したホームだから、自分たちで何とかしろということなんじゃないか」

取り残されたのは、お年寄りだけではない。私たちも取り残されてしまっているのではないか――。

2013年10月、浦住は居宅介護の担当に配置換えとなった。避難先で暮らす村のお年寄りを訪ね歩く。「ホームのお年寄りのことが、いつも気になっています」

第20章 遺体はケアの通信簿

2013年9月16日、敬老の日。昼、いいいてホームの大ホールには紅白の幕が張られ、敬老会が開かれた。ちらしずしなどのごちそうにカラオケ付き。にぎやかだった。

そのころ、入居者の1人が自室で息を引き取っていた。セツ子、86歳。震災以来、45人目のひとりだ。ホームで死は日常の中にある。

敬老会が終わった午後は一転、「お別れ会」となった。ホール中央に、ベッドのまま遺体が運ばれる。駆けつけた親族が付き添う。

セツ子は、白地に紺のユリの花模様の浴衣を着て、白いタオルケットがかけられている。看護師の佐藤智恵子（51）たちがきれいに体をふき、薄くほお紅をさしてあげた。

車いすのお年寄り約20人が参列した。当日勤務と急ぎょ駆けつけた職員40人が並ぶ。お別れ会は開所以来ずっと続き、震災後も変わらない。

「ここは、線香あげてくれっからいいよ」

お年寄りたちは、自分もこうしてもらえると想像して安心する。

1人ずつ、白菊をセツ子の胸元に置き、手をあわせる。

「わあ、きれいだあ」

お年寄りがつぶやく。

3年前に入居した時、セツ子は介助すればトイレにも行けた。2年前の秋に肺炎で入院し、胃ろうチューブをつけて帰ってきた。それからは寝たままで言葉も出なくなった。

「きのう、お風呂に入ってよかったねえ」と職員がいう。

看護師の佐藤が小さく声をかけた。「よかったね、楽になって」

佐藤には忘れられない言葉がある。十数年前、脊椎（せきつい）の難病に苦しんできたナツイが意識不明になった。当時70代。必死で心臓マッサージをすると、息を吹き返した。

数日後、ナツイはいった。

「あのまま逝かせてほしかった」

そういうお年寄りたちに、生きる実感を持ってもらえるケアってなんだろう。

佐藤たち職員は「遺体はケアの通信簿」と思って取り組んできた。

床ずれを作らないのは当たり前。痛み苦しみのない安らかな表情。「うちの職員は最期の一呼吸まで手を抜かない。だからできることなんです」。精いっぱいやる。だから亡くなった時に後悔の涙は出ない。

夕方、台風18号が飯館村を襲った。雨が音を立てて降りしきる。セツ子はみんなに見送られ、葬儀社の車でホームを後にした。

第21章 親身な介護、救われた

2013年11月10日、いいたてホームで恒例の運動会と芋煮会があった。夏祭りやお別れ会もした大ホール。今日は放射能は気にせず、天窓を開けた。

ピンク、黄、白。車いすのお年寄りがハチマキ姿で登場する。選手宣誓はクエ（96）とヤス子（79）。

家族も30人ほど集まり、玉入れやパン食い競走に参加した。

渡辺守男（わたなべもりお）（66）は、母親のヨシミ（94）の車いすを押してパン食い競走に出た。ヨシミは「よくきてくれた」とずっとニコニコしている。

震災時、渡辺は飯館村で庭木販売業をしていた。ホームの避難先が決まったら、母の近くに避難するつもりだった。結局村に残ったので原発事故の3カ月後、福島市へ移った。

月に2度は母親に会いに来る。ホームが残ってよかったと思う。避難していたら、高齢の母は体調を崩していたかもしれない。

ホームはずいぶん変わった。

渡辺が家族会の会長をしていた6年前、ホームを利用するお年寄りも職員も100人近かった。いま入居者は64人にまで減り、ケアの担当は看護師5人、介護士32人だ。

「除染すれば村に戻りたい人はいるけど60代以上だろう。80人いる入居待機者がますます増えますね」

ヨシミは6年前に入居した。糖尿病で左足を切断したのがきっかけだ。最初はショートステイを使い、そのとき友達ができた。「家族の世話になるよりも、友達がいるホームがいい」と本人からいい出した。

父もその少し前、ホームに入り、6年前、91歳でここで亡くなった。ヨシミはショートステイを使ってホームに泊まり、夫の個室で最期まで見守ることができた。「昔は姥（うば）捨て山なんていった人もいたけれど、いまは村にとって大切な所です」

運動会の翌月の12月4日、ヨシミは眠るようにホームで亡くなった。「家族以上の介護をしてもらった……」。渡辺はお別れ会で涙した。

南相馬市の穴戸（ししど）かつい（54）も、運動会で母のソノ（91）に会いに来た。震災時、ソノは寝たきりでホームにいて、父（95）は村で一人暮らしだった。事故後、南相馬に父を引きとった。自宅には、介護が必要な夫の母親（77）もいる。この10年は、両方の親の介護で明け暮れた。

「ホームが残って救われました。こんなによくしてくれる所はないです。母もここで最期まで過ごさせてあげたい」

29日、ソノも静かに息を引き取った。

第22章 今日も笑っている

飯館村の村長、菅野典雄（かんののりお）（67）には、母の忘れられない姿がある。

ある冬の朝、母が祖母のおむつを川の水で洗っていた。どの家でも「嫁」が農作業も介護もしていた。

村長に立候補した17年前、「嫁」が生き生きと暮らす村にすることを掲げた。当選の翌年、いいたてホームを始める。役場の向かいに立つホームには当然、思い入れがある。

全村避難の指示後も、菅野は村をゴーストタウンにしなかった。「必ず村に戻る」。その思いの一つとして残してよかったと思う。

だが、いまホームの職員はどんどん減っている。残った職員に過重な負担がのしかかっている。これでは昔の「嫁」と同じではないか。

「職員がこれほど減るとは思わなかった」と菅野も認める。

村民が戻ってくるとしても、高齢者が多いだろう。介護の要として、ホームは大切だ。在宅支援のヘルパーもいる。だが職員は集まらない。

職員の給料をもっと増やして募集してはどうか。施設長の三瓶政美（65）は、「それでは介護職員の引き抜きになってしまう」という。

三瓶は福島県の老人福祉施設協議会の会長。県内のホームがどこも人手不足で苦しいのを知っている。人の奪い合いになるのが心配だ。

「国や県が責任をもって、介護の職員を増やしてほしい。全体の底上げをしないと、解決しない」

村長の菅野はいう。「いま都道府県などの自治体が、被災自治体の役場に事務職員を応援派遣している。それと同じように、介護職員を派遣してもらえないか」と。

看護師の佐藤智恵子（51）は、このまま入居者も職員も減って先細り……の不安が常に頭の中にある。雪に通勤路の凍結。冬は特につらい。

「でも、今日も笑っていると思う」。職員の笑い声でお年寄りが元気になる。お年寄りは職員の心を感じ、映す鏡だから。

2013年12月27日、年末のもちつき大会がホームであった。外は雪景色。お年寄りもハチマキや姉さんかぶりで大張り切りだ。杵（きね）でつく。湯気が立ち、笑いが広がる。

初めて訪ねた6月、佐藤はいついた。「あした命が終わるとしても、いつものように今日もお風呂に入ってもらおう。それが介護」と。

全村避難が続こうと、いつものように、その日まで。

プロメテウスの罠〔４０〕 残ったホーム「家族は迎えに来なかった」

著 者 朝日新聞（生井久美子）

発行所 朝日新聞社

〒１０４－８０１１ 東京都中央区築地５－３－２

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒１０４－８０１１ 東京都中央区築地５－３－２

<http://www.asahi.com>

２０１４年１月１７日 WEB新書版発行

２０１４年２月２８日 EPUB版発行

©2014 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86526-170-7

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは２０１４年１月１７日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。